盛久

特別
チ12
3656
38

412
3656
38

景福殿文庫

いつかは五番屋ゝ八幡のすぢ人
我身月清水ぶ親世ゝを信し
毎ねあ申ゝを こゝろ事ゝ
と異東へ下ぶなるい見ぶ所
なる角清水ぶ人へ宴を立て
殺ゝ人へ宴は乃三郎十人りん
安き四ぶ清書事ぶ山乃うゝへ

清興をそゝる社うへ　南窓や

大意大世に就世言さゝもらさ

さもうしこきぢひ乃末一絲

一志形ミあわきまてや多年

徳通乃清孫孫むあしうり見や

蓋清多幾かゝ　清うまつ

清水さるに花盛　うへほまあき

上花

一ハ一月二日上　一一元

多幾か　言ふさそぬ言あ山

清心を人志ら　見波をそ

形、楊をこきまをそ、緑とこゆる

加ての宣まつい清ちいと思出乃

伝里本家八幡宮　東海道思ひ出

ちう多幾なまま　我ふきのしぬる

与馬形ゆ山を世上よ隠あき

身ともに忠をさる事に於ける揺行乃
名関のひかしにおもむき給
白川を行渡ば行人の
さひなし ちゝハ本まきの
ますほ坂や志乃宮川原四おもし
是や此行も帰るも別てハく
志るも志らぬもあふ坂乃関も

さら我をハよもとめし勢田乃
長橋うち渡りたちよりけも
鏡山さらの三年ハぬ身なまとも
影うつろへハ老曽森をるや
美濃尾張あつたの浦乃姫塩の
名をハ浪に隠されてまかれハ
野道通りなるミつうさ又ハ鶴や

言師山〳〵　志賀の浦に板橋華乃
演出の松を打渡す　棕衣うく
きく見せとおもひきや高なわ
くわさす武中山　いこゝ地のとく
のはる湖水乃大井川渡る
うきの山　越て
三穂の〻海田子の浦うち出て

三穂松原　蒲原
三穂松原山　駿河乃国士の
松　蒲倉　蒲原ふ
乃きて蒲原を過ぬ
志ゝきとる山を越水を渡りて
はゝ関原　清きぬ
蒲中　蒲一　寸乃光陰い　河窪乃

ここにこの
盛宴やかてい雪井の酒所なる世
ここにこの
そもそもきこしめす女人色のけける世
ここにこの
なまじや我ひとりわ鶴倉山乃雪霞
ここにこの
実かふ方なるひりやかくて
存知候人ハ面をはしさんしわ
ハ
あはいれとうきまいりやゆら
こいこ
思ひん　あゝ痛りゝや盛久乃
ロキ詞

物ゝと成作人ろやいかゝ盛久へ
ヒラ
ヤハ
中ハ玉屋の案してん　ちうう
ロキ
波ろ人　侍下向の由を被露
中てん人い盛久を大すれ因人
みてん罪ゝ深き殊ゝとの
侍事ゝ以ハ痛りゝなゝ
侍宮殿乃御用をあゝふりる

まてしは　　三ウ
為朝殿の人たちの物さも
物言はかくて存命の面を
さらしもくちむしくくへい
あたいれとうは初きりや孫三郎
初きりや叫ひてしは宮はい咲と
ふてしは　　四オ　　三ウ　　咲の志うしたち
明英かと作出さ祇てしは　初き

聖弘時刻まてんさてもはかと
玉殿乃内芳志ヤもなうく
なうの名わ命なうへんりを
りハなとうこうはは通を聚を
てくしを乳むあくくなるなうい
一反乃志佛をもは回向り
あたうい　ハ　二　世まうて孫芳志

一、一、一日
うるゝ事又日ごとに月清の乃
親世音を信じ法華を毎日
唱事あり弥更なき宮殿まで
くいかの乃法眼を拝りくん
法華経を読誦ト度ん　中こに
事法心志うふ法華誦くん
出屋もそなへて於ゆゆくん

一月廿日
あわるゝや大恵大悲い薩埵乃
必願空業京能将ない善薩に直見
とゝ能このゝくい空願に恵悲を
、、、、、、、、、、、、、、、、
たまわるを引導したまへゝ
、、、、、、、、、、、、、、、、
恵に利益ゆうけい後生善所
、、、、、、、、、、、、、、、、
をも祈りたにまん二世に願望
、、、、、、、、、、、、、、、、
ゆむかしくい大恵に於聖観

あら尊あらありはや或遭王難
苦臨刑欲壽終念彼観音力刀尋
段々壊　早詞　あらうれしや此経を
読誦申せば法花もたのもしう
候らん　上ヲ付　實讀誦申す人拾於
此文とはたとひ人王難乃
災にあふといふとも数段々に

上六九一
それ　又前悪業と云文は
前世に失もろもろよきまじきは
上ケ上九九ㄴ
實形もーやまなりまつたく
前なたなふ此文を誦ける　一天
あはれ経に説悪趣地獄餓鬼畜生　下同
生老病死苦以漸患以滅　これ
文のよるはも猶くに悪趣

きも三悪道ハ乃かるゝ難しや
あわゝのたしと申ふ清遊乃叡ハ
おしまは咲後生らうハ必けまき
菩ち悪山於清岩ハ法華一佛ゝ
西方於ありし又涅槃示現し
須ひてやまてうの尤於観進る
三世の利益同しくハ角刹載よ

ちりきさ於整ひまいりてもは
へきや盛久の孫乃為よもくう
うつし形もしや　篁が数や
すこし朦朧乃うらふあらふふ
灵夢を蒙りてくあしき数やに
院ハ夸の念咽て清官はの時並
咲ゝ也忠以て生きを結ふ毎し

待まのうまくるすなきい たゆは
寒波乃侍雅宮ゆは思ひ乃様子
を引袁もいまの袁のきわなれい
られうは世をつ出乃屋ゆあ
よハくくと志出る　ものゝ姿
お後をうこゝ志はゝ毛うあまを
ゆあ　雑も きゝゆう思ゆ

ヲ的

繁よわ繁乃寒ゆ乃を　ゆいの
行ま　志くわ　愛雑をいはる
あ巻か乃やゞ　後の世ゆつ出
なるうん　さそゆい乃行て
巻一ゆい座袁を袁皮志うを
りやくかなはらを行ふ面
盛久やうて出よ　なを雑乃

うこハうれうと西に向ひて
（大刀元）
祝言ぶぶ必を遂へて持はきい
太刀元後ふまりるこ時〻絲巻の
謡乃きこうわもの太刀振揚まい
こいいりふ法理ひとうわ眼ま
姫きうわ元後したる太刀を
こ〻祝いこふ拵きて隠ことなる

（上カル）
こいろもいりたる事やうを
（ヒテ）
盛久もおもひのあ分飛いたく
（ワキ上カル）
恫然とあきまた居うわ いやく
何をのうこうふハ業ふうれほと
（ヒテ上カルし）
讃誦妙法理の文 陰刑部寿部
（ワキ）
忌度祝言力 刀元 隠こ懐の
（上ヨ月）
理文あ〻こふ墨なきを知隠こふ

秋までよくわ末世にてハなるり
くわ煎み数乃ほ経や都希由
中召急きはおふ系までの法体
度ことよ重まいめしふきこうひ
下
盛久ハ鎌倉殿よりのろわく
早詞
いりふ小読りみく盛久おほす始よ
実持なる法ゆまてん頼よ急

道の一直遠路にて法前へ法系わ
あまとの法すかそみてとそ由を
上詞
ともん いりふ小盛久法おまてん
景て又
早詞
いりふ小中ほき見此噫
かきおち法昇署乃法法巻あり
もし盛久も安や見たまひさる
との法程まてしん
上
さきんあら栄

みしき乃御霊寶を爾まいらせ人

ワキ はらいし盛久の義照乃やうち成

ほおりてやあきらけく

シテ 畏てん まこと不取正覺お悟ひ

とも法て初なりしにも久遠の

大悲の光何く不到乃所なし

サシ きうるに彌陀光佛を顕こむ衆

生誓に帰らばは陀羅尼讀

きしおとわり義尊の時菩薩刹載に

ちうきさまを於もほて得時帰る

ことも永く 初來より後來乃

一点之當能として生しるわ

しゑ 六宮いまさある世に

膝然とる一天虛明となられるに

思ひあまバ千ゝ
乃ゝさをたまのゝ
窓叢ぢうけの晶
ぶ乃ぢえよすう
たゝ一きぢあう
ひゝ一ゝの清ゝ
ゆゝ光あゝ茶わ

大あ大ゝ乃ぢ飯
ゝゝ甘ゝ咲ゝ言な
言ひる時ぢのゝ
面ゝ　咲ゆ月ゝ年乃ゝを
ぬきんでゝ心人ゝえゝわ
心安くおもゝ面ゝ我ゆゝ
うける面ゝと宣ひてゆめいゝ

[illegible]
覚よくわ盛久とぞ思ひて
[illegible]
歌意乃くろのきわ　秋部
[illegible]
見をやるぞ咲んの時愛恋も同
[illegible]
さ、ぎろとあ〳〵たなるは行恋ハ
[illegible]
所望なり　恋部可盛久いと愛部覚
[illegible]
ろる心ろしてぞ恋歌をとめうま
[illegible]
はおを部恋はまこそ　ゆうう

[illegible]
盛久志りとろ法華をあ[illegible]
[illegible]
めさ[illegible]ま い　せんうとあき
[illegible]
もわひさこの　あい子秋万葉の
[illegible]
まをいはふろとばさうはきを
[illegible]
くたさ[illegible]ま い　雅い手代うと
[illegible]
夢部海　花をうけうる歌う部
[illegible]
いつ〳〵盛久盛久い事京講代部付

武略の達者武勇には乱舞技能乃
由きこしめし及ばれつゝ一座
小松殿小山まで舞楽乃遊宴乃
酒宴ありをいそいで馬に盛久
一曲一挺乃まず罷出さも澄すし
武士にハよ語らひ乃折なまいは
暁一さしとの御所全なわ是て

上ケ羽
仕留るんあわうさしく
ごえうしさいとぎざわりたきい
光家なわ盛久ある所時薫り
逢まで世も浄てためしをへうしに
下セル
松きまわるひく時かわやご天
四海乃うち乃こゝ人乃国まで
は敬東乃誠乃居も住とも給

[illegible]おくの乃毛はけ無ゞく墨らぬ
[illegible]
ゆ[illegible]毛閑すゞ実を脱ふゝ秋乃
[illegible]
[illegible]ふ墨乃松孔の墨の茂[illegible]て
[illegible]
正末孔著　毛[illegible]
[illegible]
毛[illegible]ハをう祇あ里と面うわト
[illegible]
仕里ゞ[illegible]帝ゝる墨久ゝゝろの
[illegible]
うちうゆゝしきく